

第86回

会社訪問



オリエンタル技研工業株式会社

会社プロフィール

代表者：代表取締役社長 林 進

所在地：〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-9 コンフォール安田ビル

TEL：03-3233-0821 FAX：03-3233-0825

設立：1978年10月13日

資本金：1億円 従業員：140名

営業所：筑波学園都市営業所、藤沢営業所、仙台営業所、名古屋営業所、大阪営業所、福岡営業所、筑波第1・2工場

事業内容：研究所の建築設計、研究用の設備・機器の開発製造販売、研究室のリフォーム・移設、研究室の作業環境コンサルタントなど

URL：http://www.orientalgiken.co.jp

オリエンタル技研工業株式会社 代表取締役社長 林 進 氏へのインタビュー

聞き手：野村 篤史（広報委員） 岡田 康弘（事務局長）

（取材・撮影・編集協力：クリエイティブ・レイ株式会社）

研究環境を総合的な視点から提案する
“ラボラトリーコンサルティング”で業務を拡大

— 御社は研究所を専門にした建築設計などを行っているとお聞きしていますが、まずは、どのようにして会社がスタートしたのか、創業時の様子などからお話を伺えますでしょうか。

当社を創業した昭和50年代は、化学工場の爆発や炭坑での事故などから国も法律をつくったり、立入検査をしたりと、労働安全に力を入れ始めていた時期でした。

ところが研究機関を見ると、東京大学へ行っても、民間の研究所へ行っても、化学薬品の臭いがしたり汚かったりするのは当たり前で、その上、危険がつきまとう典型的な3K（きつい・汚い・危険）の環境でした。

一方、欧米などの研究所を見ると、まるでホテルのような整った環境で研究を行っていました。こうした現実を目にすると、現状のままでは日本の研究はダメになる、これを改善することが自分たちの仕事ではないか、と思うようになりました。当社を設

立する前は理化学機器のメーカーにいたのですが、遅れている研究所の環境を改善しようと当社を立ち上げ、プッシュプル型のドラフトチャンバー、流し台、廃液タンク、マルチベンチュリースクラバー（排気ガス洗浄装置）、実験台などの開発、販売を行うようになりました。

プッシュプル型
ドライバークャンバー

ラボラトリーデザインセンター筑波工場



実験室のリノベーション施工

— 御社の現在の主な事業内容をご説明していただけますか。

当社の現在の主力業務は3つに分けられます。

第一は「建物の設計、施工管理、ラボのコンサルタント業務」です。従来は研究所を建てる際、そこで働く先生方がゼネコンなどと打ち合わせをし、それまでの経験からなんとなくこんなものを作りたいという話になっていました。

しかし、研究者である先生方は研究分野には詳しくても、設計や設備の専門家ではありません。そこで我々が研究所専門の設計事務所として、知識や経験を活かしたコンサルタント業務を行います。当社のスタッフにはかつて研究所などで働いていた経験者や大学院の博士課程を出た者などがおり、先生方のニーズに的確に応えられる人員体制を整えています。

第二は研究室で使う「設備の開発製造」で、これを茨城県つくば市にある2つの工場で行っています。

第三は研究所専門の「リフォーム事業」です。研究テーマは常に新しくなっていきますし、ある研究が一段落し次の段階へ進みたいという場合もあります。そうしたニーズに合った新たな研究設備を提案し、既存の研究所のリフォームも手掛けています。

— 御社では筑波大学や東京農工大学大学院との産学連携なども進められているようですね。

そうですね、産学連携にも取り組んでいます。例えば、東京農工大学との連携の一環として、当社で

は動物実験のための施設なども持っています。ここには博士課程で学んだ専門知識を持つ当社のスタッフもおり、研究者の方々に安心して動物実験に取り組んでもらうことができます。

— 創業時の業務から現在のような形へと変わっていったのは、いつごろからだったのでしょうか。

今のような業務になったのは、10年前ぐらいからです。創業以来、研究設備を扱ってきましたが、やがてバブルも崩壊し、製品納品時、価格競争になってしまい、そのため、このままでは仕事はあっても利益が出ない、と強く感じるようになっていました。

ちょうどその頃、欧米には、日本ではほとんど知られていないラボラトリーコンサルタントという仕事があり、きちんとビジネスとして成立しているということを知りました。設計や設備の専門家ではない研究者の先生方に、最適なものを提案していく…。これからの日本に必要なのはこれだと思い、欧米の専門企業と提携し、その事業に乗り出しました。

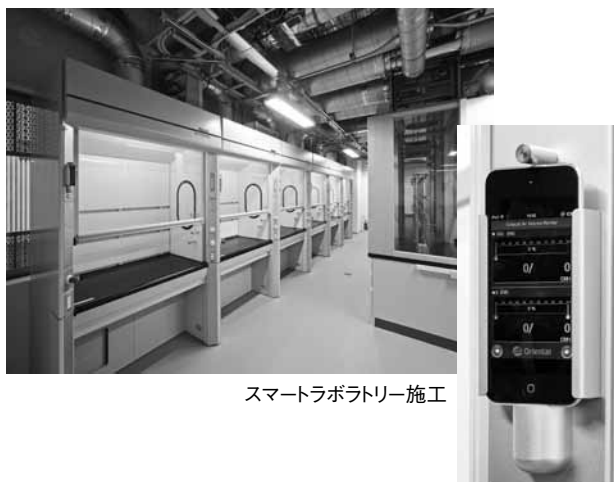
— これまでに経営者として強く印象に残った仕事や出来事があれば、お聞かせいただけますでしょうか。

当社がここまで来ることができたのは、何といっても海外の友人たちの協力のたまものであり、経営者として強く印象に残っていることのひとつと言えます。

創業以来、どうせやるなら世界最先端の技術を提

供したいと考え、アメリカやヨーロッパの基準、各種技術、製品を積極的に導入し、当社製品にアセンブリ（一本化）して自社製品のレベルアップを図ってきました。そして、このことが、高効率で環境負荷の極めて低い「グリーンラボラトリー」、また、ITを使って研究所をコントロールする「スマートラボラトリー」という現在の製品群の開発につながっていききました。こうした技術を独占的に提供してくれた海外の友人たちには大変感謝をしています。

設計の面でもアメリカの最先端技術を導入したことが、大型物件の受注にもつながっていききました。今では研究施設を手掛ける際には、大手ゼネコンからも相談を受けるようになり、施設内の研究設備も受注するということができるようになりました。



スマートラボラトリー施工

——逆に、経営上困難だとお感じになった時期や出来事があれば、お聞かせいただけますか。

会社を設立して10年ほどは、求人でも悩みました。なかなか優秀な人材を採用できず、仕事はとれるのですが、工事などが思うようにこなせないということもありました。

その状況を変えたのが、設立10周年を機につくば市に工場を建てたことでした。求人広告に新しいつくば工場の写真を載せたことで、その建物を見て、採用試験に来てくれる人が増えたのです。平成5年ごろからは国立大学や有名私立大学の卒業生も採用できるようになり、今はそのメンバーが会社の中心になって活躍してくれています。

——御社の経営方針や経営理念などをお聞かせください。

方針としては3つあります。1つ目は、モノマネの製品でなく、新しい市場を創出するための社会シーズ（研究開発における要素技術）の追求。2つ目は、ラボラトリーエンジニアリングメーカーとして、国際社会で認知されるナンバーワン企業を目指すこと。3つ目は、顧客満足度重視の高品質経営を図って収益を高め、会社の発展と社員の生活向上を目指すことです。

——今後の目標、あるいは現在、課題となっていることなどはございますか。

5年後になりますが、中期経営計画第40期において売上100億円の達成、社員教育の充実、そして、主な事業内容として挙げた3つをワンストップで提供する当社独自のモデル、つまり、オリエンタルビジネスモデルを確立することです。

社員に対しても常に言っているのですが、しっかりと目標を持ち、戦略を立て、積み重ねてきたものをベースに突き進んでいくことが大切だと思っています。そのために売上100億円の達成を目標としました。2点目の社員教育の充実では、若手の優秀な社員もどんどん入ってきており、そういう人材に博士号やMBAの取得のために大学院などで学ぶ機会を提供したり、あるいは海外の取引先に行って更なる知識を吸収してきてもらおうと考えています。

——御社では海外での事業展開などは考えておられるのでしょうか。

当社を必要としているところが、国内にはまだまだたくさんあり、国内をしっかりとやっていけば、海外へ出て行く必要はないと考えています。

日本の研究所の中で、欧米と肩を並べられる設備を持った施設は全体の3割ぐらいではないかと思います。研究環境が良くないと、何よりもいいデータがとれません。昔に比べ、最近のデータは細かいところまで要求されますから、なおさら研究環境の向上が重要になってくるはずです。



つくば分析センター



筑波工場



実験室のショールーム

日本は輸出立国としてモノづくりの点では優れていますが、それだけでは、他の国が良い製品をより安く作り出せば、追い付かれてしまいます。そうならないためにも、日本は付加価値の高い研究に向かっていくべきで、それを支える仕事はますます重要になってくるものと考えています。

——ところで、林社長ご自身でモットーとされている言葉や座右の銘などはございますか。

初めてそれを見たとき、文章とはこんなにも強いものを表現することができるのかと、心にガツンと響いた詩があります。サミュエル・ウルマンという人が書いた「青春の詩」で、その一節は次のようなものです。

“青春とは人生のある時期をいうのではなく、心の様相をいうのだ。すぐれた創造力、たくましく意思、燃ゆる情熱、怯懦をしりぞける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こういう様相を青春というのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時、初めて老いがくる。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。…”

困ったことがあったときなど、この詩を読むのですが、その度に奮い立たせられます。多くの人に読んでもらいたいと、この詩をパネルにして会社の事業所に掲げたり、設計事務所には英語の原文を貼ったりしています。

——最後になりますが、科学機器協会に対してご意

見やご要望などがございましたら、お願いいたします。

当社はアメリカの協会にも入会しているのですが、日本の団体とは、やはり違うなと感じています。アメリカは訴訟社会ということもあり、それに巻き込まれないよう協会がスタンダード（基準）を作っているのです。日本ではそうしたものは無いようですが、ラボで使用する各種機器や設備のスタンダード（基準）やラボ環境のスタンダード（基準）などを科学機器協会が作ってもいいのではないかと思います。

海外旅行やカメラなど

仕事を通して趣味が広がる

趣味はごく一般的で、ゴルフ、旅行、写真撮影などです。旅行は仕事でアメリカやヨーロッパに出張することが多く、それを兼ねていろいろな場所を訪ねるようになりました。写真が好きになったきっかけも仕事でした。ある時、製品カタログが必要になったとき、大きなサイズのカメラを手に入れ、自分で撮影を行い、掲載する原稿や図面に至まで全て自分でやっていました。写真を始めてからは、すっかりカメラのとりこになり、今まで随分たくさんのカメラを手に入れて来ました。

